

収蔵品紹介

可児市久々利の大平、大萱には、桃山時代から江戸時代にかけて多くの窯が築かれ、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった焼き物が生産されていたことで、全国に知られています。

今回は、黄瀬戸鉦鉢と鼠志野草文額皿を紹介します。



黄瀬戸鉦鉢

16世紀 口径16.3cm 高4.5cm

梅樹と咲く花、草の簡略化された線刻は、その表現が見事である。油揚げ手の器肌と花にのせた錆、枝と草のタンパンの点景は、黄瀬戸の深い味わいを流暢に語っている。

輪高台の内に、輪トチの痕がある。

鼠志野草文額皿

16世紀 22.6cm×19.8cm 高4.3cm

型打ちにより長方形、隅切に整えた額皿（または角鉢）で、体部は斜方に開く。鉄化粧後に、高山植物であるクガイソウを掻き落として一面に描き、写実的で達筆な線とバランスは絶妙である。

裏面も含め、緋色の発色が美しい。久々利大萱の産かと思われる。



収蔵資料展

大森奥山の山論

～村の命運をかけた争い～

● 会 期 ●

2月7日(火)～4月8日(日)

可児郷土歴史館では、23年度3回目の企画展として収蔵資料展「大森奥山の山論 ～村の命運をかけた争い～」を開催します。「大森奥山」とは今の桜ヶ丘・皐ヶ丘から愛岐カントリーの一带をさし、宅地造成前まではなだらかな山でした。

雑木林からなるこの山は、柴刈りあるいは秣場として利用され、この入会権（使用权）をめぐる江戸時代から大森、羽崎、二野、久々利の村どうしで争いを繰り返してきました。

今回の展示では、明治時代の初め、大森村が羽崎・二野村の入会権を制限しようと訴えた山論にスポットをあて、当時の村のあり方や住民の団結、村のリーダー像などについて考えてみたいと思います。

村の命運をかけた東京上等裁判所まで争った資料は、幸い双方の自治会に良好な形で伝えられ、他の資料とともに市史編纂を機に教育委員会で預かることとなりました。およそ200点に上る山論関係資料の中から、次の主な資料を展示いたします。

奥山山論絵図（明治7年）／岐阜県聴訴課判決文（明治8年）／東京からの書状／訴訟費用調書／東京上等裁判所言渡書／奥山入会地界証の皿／山論資料保管箱（以上明治9年）など



◀東京上等裁判所言渡書

▼山論資料保管箱



郷土館講座のお知らせ

郷土館講座を次のとおり開催します。「市史をひもとく」と題して可児市史の執筆者を講師に迎え、市の歴史について学んでみませんか。

○日時・内容

	日付	時間	内容	講師
1	2月12日(日)	午後1時30分	明治初期の山論と裁判～村の命運をかけた戦い～	石川一三夫
2	2月19日(日)	午後1時30分	土岐久々利氏の動向	横山住雄
3	3月4日(日)	午後1時30分	千村平右衛門家と在所久々利	鈴木重喜

○場 所 可児郷土歴史館（久々利公民館 会議室）

○定 員 30人

○申込み 電話・FAX・Eメールで可児郷土歴史館へ申し込んで下さい

○締切り 2月3日(金)

※申込み多数の場合は、抽選
問い合わせは、可児郷土歴史館まで



▲昨年の市史編纂講座

写真で見る今・昔 (2)

木造の広瀬橋と犬山街道

写真1には、「広瀬橋流出ニ付キ大正15年工事中、沢渡ヨリ若尾本店ヲ望ム」と書き込みがある。

広瀬橋とは、犬山市と御嵩町伏見を結ぶ犬山街道の可児川に架かる橋で、春里地区の坂戸と下恵土を結んでいた。後にコンクリートの永久橋に架け替えられ、さらに昭和53年(1978)県道の付け替えにともなって新広瀬橋が出来ると取り壊された。

桁橋とよばれるこの橋は、太い丸太で組んだ橋脚の上に桁を渡して梁を並べたもので、橋脚の数は11を数える大きな橋であった。写真左手が上流側にあたり、4本の太い柱からなる橋脚の基部は方形に川原石で固められ、欄干は未だ工事中で大八車や橋の上に敷く土盛も見られる。

橋の上には半纏を着た大工や作業員にまじって、着物姿の子どもたちも並んでいる。

ところで、広瀬橋を流出させた可児川の出水であるが、これは大正14年(1925)8月15日中濃・東濃地方に大きな被害をもたらした大雨であったと思われる。可児地域では午前1時頃より豪雨となり、朝9時頃より増水し、午前11時30分には広瀬橋が流出、増水した水は坂戸、塩、土田の井之鼻地区に流れ込み、あたかも湖のようになったという。また広瀬橋上流の可児川では4つの橋を除いて橋梁はすべて流出し、湊之上、平貝戸、石井、田白、二野、久々利など広範囲に浸水の被害がでている。(『可児町史』通史編)

市内の木造橋は洪水のたびに復旧されてきたが、昭和20年代の後半から30年代の前半にかけてコンクリートの永久橋に次々と架け替えられてきた。写真の広瀬橋も昭和28年12月にコンクリート橋に架け替えられている。現在では二野の古井橋(橋脚などはコンクリート)が唯一、木造橋の姿を今に留めているに過ぎない。

写真2は工事中の広瀬橋とほぼ同じ頃撮影され

た犬山街道で、広瀬橋のたもとから西方に向かって撮ったものである。犬山街道は御嵩町伏見から中恵土ー下恵土ー坂戸ー塩ー菅刈を通して犬山に至る街道で、明治22年(1889)から工事に着手し、同25年に開通している。

道幅は2間(約3.6メートル)程であったが、可児から犬山・名古屋方面への物資や垂炭の輸送の主要道路であった。大正12年に県道御嵩一犬山線となっている。

草葺屋根が並んだ街道の左には、広瀬橋のたもとで履物の製造・卸・小売を営んだ若尾履物店が写っている。店前にはキドリの終わった下駄の材料が置かれ、道路の向かいには材料となる桐の丸太が積まれている。職人らしき人が腰を下ろしている姿も見られる。正面に写る山は、現在の可児高等学校が建つ山である。



▲写真1 広瀬橋の架け替え(坂戸・若尾隆雄氏所蔵)



▲写真2 大正15年頃の犬山街道(坂戸・若尾隆雄氏所蔵)

可児の民俗行事紹介 2 春の年中行事

土田白鬚神社 お鋤まつり

毎年3月11日におこなわれる土田白鬚神社の祭礼で、豊穰を願う行事である。以前は夜おこなわれていたようであるが現在は夕方（午後3時）から執りおこなわれる。

祭礼当日は朝から祭の準備をおこなう。生のサワラを割ってお膳板、箸、お鋤を作り、お鋤に稲穂と柿を結び神前に供える。お膳板には「オネリ」と呼ばれる赤飯を丸く握ったものをのせる。



▲お鋤と「オネリ」

午後3時からの神事後、お鋤祭が始まる。氏子総代から選ばれた8人が、黄色い神官装束を着た禰宜役

と白装束の奉仕者7人を務める。

1. **鋤おろし** 禰宜が大きな木の鋤を持って社前に座し、拍手拝礼して鋤を掲げ、「白鬚神社の御前に春始めて 鋤おろしのでーい」と唱える。氏子一同も「ホーイ」と唱える。「若い衆もでーい」「デーイ」「年寄り衆もでーい」「デーイ」「みんな押し廻してでーい」「デーイ」と唱え合う。
2. **田おこし** 奉仕者の1人が鋤を持って田おこしの所作をする。広場を3回まわって引き下がる。
3. **田かき** 奉仕者3人が馬の口取り、馬、マンガ（馬鋤：竹で作った長方形の枠）を持つ役となり、田をかく所作をしながら広場を3回まわる。
4. **シロスリ** 奉仕者1人が木の鋤を持って、シロスリの所作をしながら広場を3回まわる。
5. **種播き** 奉仕者の1人が馬になり、粃に見立てた小石を包んだムシロを背負い、他の2人が前後について広場をまわる。そして広場中央で小石を手桶に入れ、ムシロは北半畳に敷く。禰宜はその上に座り「白鬚神社の御前にてよき種を播こうなあ」と唱えながら種播き（小石）

の所作をする。その後、紙に書いた唱えごとを読み上げる。

「白鬚神社の御前にてよき日の本の種を播こうなあ」……「若い衆の所へは末繁盛の種こうなあ」「年寄り衆の所へは早稲万倍の種こうなあ」「一本植えると万本となる」「稲の長さは一丈八尺。穂の長さ一尺八寸、粃の長さは一寸八分」……禰宜が読み終えた後、皆で唱和する。

6. **田植え** 禰宜が1人で唱えごとを読み上げる。「鳥も歌う 夜もふける いざさら起きて苗をほむるよ 苗をほむるよ」「苗は茂り 盛り苗なあ」……

7. **ささら太鼓** 禰宜がササラをすり、奉仕者が太鼓を叩きながら「エイコニナガマキデンドラコ（永古に長々伝伝穀）」と囃しながらまわる。

8. **鳥追い** 戦前まではささら太鼓の後、氏子が白装束の奉仕者を囲み、「ホーイ ホーイ」といって大脇の村境まで押し合って行った。今は、広場で「ホーイ ホーイ」と鳥を追う所作だけをする。現在のお鋤祭はここで終了し、オネリとお鋤を集まった氏子に配る。各家ではお鋤は神棚に供え、苗代田を作るときに持って行って焼き米とともに供えて豊作を祈った。

本お鋤まつりはその所作や祭文から田遊びの流れをくむ行事と考えられる。近年は馬のかぶりものを着けるなど変化しつつあるが、それでも貴重な民俗行事である。



▲お鋤まつり(田かき) 平成16年

※「可児市史第4巻民俗編」「可児町の文化財 第3集」「生きていく民俗探訪 岐阜」を参考とした

23年度 活動報告

企画展・特別展の開催

○特別展「化石から見た可児」

～ヒラマキウマの生きた時代とその成り立ち～

7月26日(火)～9月11日(日)開催

○企画展「可児の災害―大雨・大風・大地震―」

9月13日(火)～10月2日(日)開催

○企画展「まるわかり金山城」

10月4日(火)～11月20日(日)開催

講座・講演会の開催

○親と子のふるさと教室

「古代の勾玉をつくってみよう」7月24日(日)

「化石の話を聞いてレプリカに挑戦しよう」

8月7日(日)

○講演会

「ヒラマキウマの生きた時代とその成り立ち」

講師 宮田和周先生 8月27日(土)

「金山城の魅力」講師 長沼毅氏 11月3日(祝)

○小学校出前講座

昔の生活体験(石臼引き、洗濯、炭火アイロン、
ビク・背負子体験など)、陶芸体験

10小学校で19回実施

23クラス、1,024人の児童が体験

○歴史館講座を2月～3月に3回開催予定



▲出前講座(広見小学校)

博福連携事業

昔懐かしい道具を使って脳を活性化させる回想法に活用するため、マスや五玉算盤、豆炭アンカなどの民俗資料を、福寿苑デイサービスセンター、可児川苑デイサービスセンター等に貸し出ししました。

可児郷土歴史館調査報告書第1集

「今八幡神社祭礼記 翻刻集(明治・大正・昭和)」を2月末に発行

可児市史全6巻の発刊をもって市史編纂事業が終了し、編纂室で行ってきた歴史資料等の調査事業は平成23年度から可児郷土歴史館で引き継ぎました。これにともない今までの「市史調査報告書」(第1～5集を発行)も新たに「可児郷土歴史館調査報告書」として引き続き発行していくこととしました。

今回は、その第1集として市指定文化財「今八幡神社祭礼記」の翻刻集を発行いたします。正徳4年(1714)から書き綴られた祭礼記には、年々の主な出来事や世相、村の行事のほか、天候や災害、作柄、米相場など興味深い内容が記録されています。このうち江戸時代の記述については、『可児町史』史料編にほぼ収録されているため、本報告書では明治元年以降、昭和63年までを活字化して発行します。

◇体裁 A4判、約70頁(内2頁口絵)

◇販売価格 1冊 500円

◇販売場所 可児郷土歴史館

兼山歴史民俗資料館だより

兼山歴史民俗資料館ではロビーで金山城展を行っています。これは可児郷土歴史館で実施した「まるわかり金山城」展のダイジェスト版で、分かりやすい解説とともに発掘調査の出土品を展示したものです。

2月20日(月)からは市役所1階ロビーに場所を移して展示しますので、是非ご覧ください。



▲兼山歴史民俗資料館での展示

資料の寄贈・寄託

○ 寄贈資料

平成23年4月から同年11月までに次の方々から貴重な資料を郷土歴史館に寄贈いただきました。早川智、亀井和紀、藤田弘武、加治屋充生、加藤孝造、伊佐治誠（敬称略）

ありがとうございました。

主な寄贈資料

「ノジュール」（早川智氏寄贈資料）

ノジュールとは化石や砂粒などを核に、珪酸や炭酸塩、鉄分などが濃集し、団塊状に固まったものをいいます。寄贈のものは、二野地内平牧公民館東の平牧層の露頭で採集されたものです。直径が約40cmと約50cmの2点で、いずれも卵形をしています。うち1点は真ん中で二つに切られていますが、残念ながら化石は含まれていませんでした。大きなノジュールが列をなして存在したといい、貴重な地質資料の一つです。

○ 寄託資料

大切な資料を、所有権はそのままで、郷土歴史館で預かる寄託制度があります。今年4月以降11月までに「今八幡神社祭礼記」「久々利小祭祭典勘定帳」が寄託となりました。

主な寄託資料

「今八幡神社祭礼記」（今八幡神社所蔵）

可児市指定重要有形民俗文化財
縦16cm、横45cmを測る横帳で、正徳4年(1714)から昭和63年(1988)までの約270年の祭礼の記録が236丁に綴られています。

祭礼記には江戸時代に演じられた狂言（地歌舞伎）についての記述が多く、地歌舞伎に関する記録として一級資料です。また、毎年の世相、天候、米相場などが記され、近代になってからも主な出

来事や道路、河川の改修の様子などが書き継がれています。

※本資料に関しては、丸山幸太郎「美濃飛騨の地芝居はいつからか」『郷土研究岐阜』第112号、『岐阜県教育史』通史編古代・中世・近世などに記述がある。

今八幡神社祭礼記▶

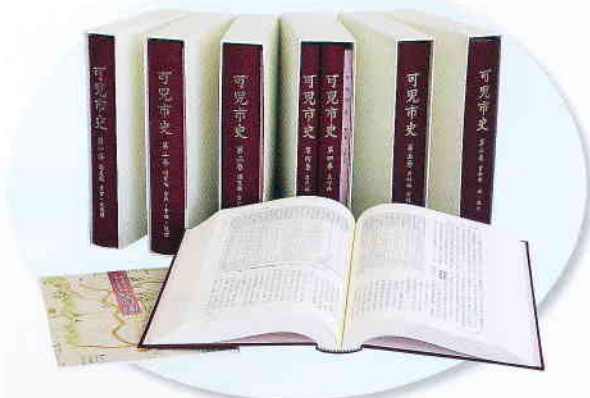


刊行物のご案内

可児郷土歴史館、兼山歴史民俗資料館では、郷土の歴史に関するさまざまな刊行物を販売しています。

主な刊行物

「可児市史」第1巻～第6巻 各巻3,500円



「可児市の記念碑」 1冊 1,000円

「可児市の仏像」 1冊 400円

「兼山町史」復刻版 1冊 3,150円

「続兼山町史」 1冊 1,000円

この他にも、多くの刊行物を販売しています。
詳しくはホームページでご確認下さい。

可児郷土歴史館

〒509-0224 岐阜県可児市久々利1644番地1
TEL 0574-64-0211 FAX 64-0238
Eメール kyodorekisikan@city.kani.lg.jp

- 開館時間／午前9時～午後4時30分 ●休館日／月曜日、祝日の翌日、12月26日～1月5日
●入館料／大人310円(30名以上の団体250円)、高校生以下無料